教育目標 「 知性豊かに 心さわやか たくましく生きる 」

志 学校だより

R5 .2 .7

四日市市立内部中学校　第 40 号

マナーを大切に

ふと気がつくと、間もなく２月も中旬に入ろうとしています。「光陰矢の如し」と言う言葉を、しみじみと感じています。また、１カ月後には、３年生が卒業しまっていると思うと、とてもさみしい気持ちになりました。

２月は、様々な場面や枠組みにおいて、１年間の「振り返り」をする時期となっています。授業においては、「何がわかったか。何がわからなかったか」や「何ができたか。何ができなかったか」を振り返るべきだとお伝えしましたが、１年間の総括においても同じことが言えます。今回は、「内部中学校の良さ（できていること）」について振り返ってみたいと思います。

まず何と言っても「気持ちの良いあいさつができる」ことが、内部中学校の良さだと思います。朝、どの生徒に出会っても、さわやかなあいさつをしてくれます。おかげで気持ち良く一日をスタートすることができます。このことは、生徒一人ひとりが、仲間や周りの人を大切にしようと思っていてくれるからでしょう。良いあいさつは、良いコミュニケーションの始まりです。

もう一つ挙げるとすると、それは「マナーの良さ」です。令和３年の４月に自分が着任した時、部活動紹介や、発育測定や学年集会における「待つ」「移動する」際の姿や態度の良さに感心したことを、今でもはっきりと覚えています。この「キリッ」とした姿や態度は、今も内部中学校の生徒たちに引き継がれている良さです。テキパキと素早く移動したり、きれいな列をつくったりすることで集団の雰囲気が良くなりますし、物事が効率よくスムーズに進行します。

マナーとは、**「社会において人々が互いに気持ちよく過ごすための、行動や作法、礼儀のこと」**ですが、特に集団生活を送る上で、マナー良く行動することがとても大切です。このことは、普段からお伝えしている「周りの人を慮ること」と同じです。自分がどのような行動をすれば、相手が気持ちよく感じるか、良好な関係がつくれるかを考えながら生活することとても大切です。また「行動」だけでなく、前号でお伝えした「言葉」も同じことです。相手に敬意をはらったり、気持ちを考えて話したりするようにしたいものです。逆に言えば、不用意に発した「言葉」で、相手の心を傷つけてしまうこともありますので、気をつけて話すようにすることが大切です。

マナーよく毎日を過ごせることができる人は、「素敵な社会人」であると言えます。みなさんが学校を巣立って、様々な社会に出て行った際に、自分はもちろんのこと、関わる周りの人たちが気持ちよく過ごせるようにすることが重要です。今回紹介した以外に「マナーを大切する」ことにはどんなことがあるかについて、考えたり、仲間や家族と話し合ったりしてみてください。

本の紹介　『雲を紡ぐ』　伊吹 有希 著　　文芸春秋

この本の作者である伊吹有喜さんは、四日市市出身の小説家で、四日市市観光大使も務めています。『雲を紡ぐ』の次に出版された『犬がいた季節』は、四日市高校が舞台になっています。『雲を紡ぐ』は、手仕事の街「盛岡」を舞台に、繰り広げられる、三世代に渡る家族の物語です。

自分は盛岡には一度しか行ったことがありませんが、自然と歴史ある建築物がうまく溶け合った素敵な街です。いつか再訪してゆっくり滞在したいと思っています。作中には実際にある魅力的なカフェが何店も描かれています。「機屋」「ふかくさ」「クラムボン」「チロル（チーズケーキが看板メニュー）」「carta（残念ながら閉店）」で、すべてのカフェに是非行ってみたいです。その他にも、「福田パン」や「中央バター商会（山ぶどう原液）」「平船精肉店（ローストチキン）」等の食べ物に関するお店や、「クルミゆべし」や「小岩井農場のチーズケーキ」「ターキッシュ・デイライト」といった、おいしそうな「おやつ」もたくさん描かれています。本筋とは関係ないことから紹介してしまいましたが、おいしい食べ物や素敵なカフェがたくさんある街は、絶対に素敵な街です。食文化が栄えることは、文化や工芸が栄えること、街が豊かに発展することと、相関関係にあると思います。

本の内容の紹介を忘れてはいけませんね。『雲を紡ぐ』は、羊毛を手仕事で染め、紡ぎ、織りあげられた「時を越える布・ホームスパン」をめぐる親子三代の「心の糸」の物語です。学校に行けなくなった美緒（高校２年生）の唯一の心のよりどころは、祖父母がくれた赤いホームスパンのショールでした。ところが、このショールをめぐって母と口論になり、美緒は岩手県盛岡市の祖父の元へ行くことになります。これ以上はネタバレになってしまうので、紹介を控えます。

話は戻りますが、『盛岡』は岩手の県庁所在地で、東北新幹線（秋田新幹線と分岐）の拠点駅でもあり、とても歴史のある街です。「わんこそば」だけを食べて帰ってきてはいけません。

脱線ついでに、関連する話をします。自分は松任谷由美（ユーミン）さんの大ファンです。数あるユーミンの曲の中に『緑の町に舞い降りて』という曲があり、大好きな曲の一つです。

この曲は、名曲中の名曲『ＤＥＳＴＩＮＹ』を含む傑作アルバム「悲しいほどお天気」に収録されていて、ユーミンが盛岡を訪れるために花巻空港へ降り立ったときの様子が、素敵に描かれています。みちのくの新緑のあざやかさが目に浮かんでくるようです。歌詞の一部を紹介します。

輝く五月の草原を　さざなみ遥かに渡っていく
飛行機のかげと雲のかげ　山すそかけ降りおりる
着陸間近のイアホンが　お天気知らせるささやき
「Ｍｏｒｉｏｋａ」というその響きがロシア語みたいだった

新緑の盛岡に行ってみたいと強く思います。でも、実際に行くとなると、飛行機ではなく、東海道新幹線と東北新幹線を乗り継いで行くことになるでしょう。それもまた、楽しみです。